

2022/3/25

(うと Q 世話し野望が生む焦り) 書庫版



以下は自分の観察による私見です。

或る大国がある国に「社会正義」を犯して武力侵攻をした。

その「不正義」を犯す大国に武器供与をしようとする隣の大国に「人道的見地」から世界が疑義を唱えた。

「なぜ蛮行の手助けするのか」

その隣国にしてみれば侵略された国が「民主化」されては困るからでしょう。ましてや侵略をした国自体が「民主化」されては更に困るから。

何故なら己が周りにある「考えを同じくする」緩衝帯がなくなって自国が丸裸になってしまうからです。

しかしやっている事自体は「社会正義」に反する事ですから反対陣営の「頭目」がそれを「思い止まる様」説得を試みた。

無論世界の大国同士の会談ですからその中身は公表されませんが、その会談の後の説得を試みた陣営の報道官がこう申しておりました。

曰く

「(あなた方は) 自らの行動を歴史書にどう書かれないか決断しなければならない」

と。

そして別のメディアが是とは別の話として

この会談で「蛮行を黙認しサポートしよう」とする国の「頭目」が

「一部動揺する場面も見られた」

と報じておりました。

その二つの報道に接し、ある想像が浮かびました。

この二人、即ち侵略した国の「頭目」とそれをサポートしようとする国の「頭目」の頭の中

にあるのは「現状維持」や「現状後退阻止」ではなく、この蛮行の真因は

「後代の歴史書に帝王として名を残し、あまねく民から神よ、仏よと崇められる為には、何
が何でも「自分一代で」事を為さなくてはならない」

という「手柄独り占め妄念と残余命とのせめぎあいからくる焦り」故ではなからうか？

仮に「経世済民」に基づいて民の安寧を願う事が主眼なら何も自分一代に拘る必要は更々な
く後継の何世代かに渡ってそれを為す発想があってもいいからです。

しかしこの二人にはその発想がまるでない。

要するに後継を信じてもないし育ててもない。

いや、むしろ自分以上の者が出てきてもらっては困るので芽が出そうになると早い段階で
摘んでしまう。

そして

「兎に角何が何でも自分の手柄にしなくては意味がない」

という思いで頭の中がいっぱいになっている。

その妄念が判断を狂わせ通常なら軍事兵法の真髄

即ち「戦わずして勝つ」

その第一は「敵を味方につける」外交

次には兵糧攻めにも似た「情報戦」「経済戦」

それをすっ飛ばして例の国はいきなり最下等手段である

「武力戦」

に打って出た。

そして又隣のお友達国も例の国の例の人同様にその焦りから上記二つを差し置いて最下等
手段の「武力戦」に近づきつつある様子が見て取れるので世界中が苛立ち始めた。

将に「大欲は無欲ににたり」

欲深さから焦ると結局は全てを失う（欲を抱かなかったのと同じ結果になる）が如し。

本件につき軍事兵法の真髄を教えてくれた嘗て軍人の亡き父はこう申しておりました。

「無欲は大欲ににたり」

欲をかかない方が得てして結果が良い

と。